

俺の精液がワクチンになるらしいから、とにかく女学生へと打ち込んでいく

## 【登場人物紹介】

### ●鈴木悟

本作の主人公。32歳。女学園勤務。数学教師。三年二組を担当。独身。  
ある日から唐突にモテるようになる。

その原因は、世界を守る為に降臨したという女神の仕業だった。  
なお、女神が降臨する以前からも、ある程度はモテていたらしい。

### ●佐々木詩織

三年二組。

茶髪ロングのハーフ系お嬢様。スタイル抜群。

学績優秀、運動神経抜群。また、学生会長を務めている才女。

以前から悟のことが好きだったが、なかなか言い出せずにいた。

●高島沙羅

二年生。爆乳の持ち主。

茶髪ツインテのギャル系。ガサツな性格で欲望に忠実。ドSであり、悟をめちやくちやにしたいと思っている。

●九条院ミレン

留学生。二年生。

透き通るような蒼い長髪の少女。胸が大きい。天才肌。

日本に来てまだ間もないため日本語がまだ上手く話せない。何故か沙羅と気が合う。いつも一緒に行動している。

●山田美羽

二年生を担当する教師。35歳。既婚者。爆乳の持ち主。

育ちが良くて、学園内でも常にスーツを纏っている。黒髪清楚。

普段は大人しいものの、可愛いものに目が無い。



あらすじ

「先生ー!!」

「こっち向いてくださーい!!」

「大好きですわ♪」

「ああんっ、もう我慢できないよお!!」

「お兄様……!!」

「悟さーーんっ!!」

「ちよっと、どきなさいっ。先生を独り占めするなんて許せませんわ!!」

「貴女こそ、お兄様に手を出すなら容赦致しませんわよ」

「私だって負けないからね」

「私も負けません!!」

「ちよっと、抜け駆け禁止だよ!!」

「そうですわよ。抜けがけした方が勝ちとかじゃありませんわ」

「みんなで仲良くしましょう」

「お兄様……好き……」

「私だって好きだよ」

「私のことだけを想ってくださいませ」

「先生は、みんなの先生……」

「だけど、本音を言うと私のことだけ見てほしいな」

「私も……」

「私だって……」

「でも、それは無理なお願いですよ」

「私は、一緒に居られれば幸せだから……」

「先生が、みんなのことを大切に思ってくれていれば……」

「それならいいんだけどさあ……」

「やっぱり、私だけのものになってほしいですわ」

「先生に彼女ができたらどうします？」

「そんなの決まっていますわ」

「もちろん、私たち全員で奪いに行くんだよ」

「先生は、誰にも渡しません。外のヒトには渡しません!!」

「絶対に守り抜いてみせますわ」

「どんな手段を使っても……」

「お兄様のためならば仕方がないよね」

「そういうことですわ」

「先生は渡さないんだから」

「覚悟しておいてくださいね。先生は私たちのものなんだから」

「私たちが独占するべきなのですわ!!」

………

嫉妬。愛情。独占欲。

女学園は、一人の男への愛に満ちていた。

あまりにモテすぎて辛い。ハーレムの日々……

ある日に、いきなり俺は女学生の集団から告白された。

一人から呼び出しを受けて、のこのこと行ってみたら、そこに大勢の女学生が

俺を待ち構えていて……蕩けるような淫猥なムードの中で一斉に告白された。

ある者は耳まで真っ赤に、ある者は涙を浮かべ、ある者は膝を震わせて……

その人数は、なんと………いや、分からない。数え切れない人数だった。

……どうしてこうなった!?

確かに、ここは孤立無援の箱庭的な女学園だ。

周りは女性ばかりで、若い男と言えば俺くらいしか居ない。

勤務して、もう数年が経つか……

決してモテるタイプとは言えない俺でさえ、何回かは告白されたことがある。

恋愛に憧れる世界に、若い男が俺一人。そういうこともあるのだろう。

だけど……なんだこれは!?

こんなことがあつて良いのか!?

その日を機に、もうめちやくちやな毎日である。

俺の暮らす寮に毎朝と女子が詰め掛けて……炊事・洗濯やら、とにかく世話を焼きまくってくれて……学園に入れば、争うように女子が俺の取り合いだった。

女子の荒波が俺を囲い、無遠慮に抱き着いてきたり、中には頬にキスしてくる者もいる。男の夢みたいだけど、急にこうなったのだ。戸惑いは隠せなかった。

……もしかしたら、全てがドツキリかもしれない。

そういった可能性を抱きながら、俺は現状を飲み込んでいたのだが……

そんなある日のことである。事態は忤度なく急速に展開していく。

一人の生徒が俺の元にやってきたのだ。



学生服を着ているけど見覚えは無い。

一度でも見たら忘れないくらい、極めて容姿の整った女子なのに……

彼女は自らを女神と名乗り、俺のことを運命の男だと告げてきた。

何を言っているのかよくわからなかったが、とりあえず話を聞いてみることにする。なにを言われても驚かないつもりだった。

しかし、それは無理な話であり……彼女には未来が見えているのだという。

彼女によると、近い未来に地球がゾンビで溢れる世界となるらしい。

そこで、神である自分が救うためにやって来たというわけなのだそうだ。

「ふざけてる雰囲気は無さそうだけど……」

「はい。とにかく聞いて下さい。いま、世界は危機に瀕しています」

「俺はどうすれば良いんだ？」

「あなたには、これから出来るだけ多くの女性とエッチして頂きます」

「なんだって？」

「貴方の体液は、とても特殊なようです。その体液を用いれば、ゾンビに耐性のある身体を作ることが出来ます。汗や唾、涙、尿……貴方の体液なら、いずれも効果的ですが、やっぱり一番は精液です。貴方の精液がワクチンとなって女性を救えるでしょう。中出しは勿論、ゴックンも有効かと。そこは好きに」

「そうだとっても、精液だなんてそう出来ることじゃないだろう」

「貴方はもう気付いているハズです」

「……………!!」

「まずは身近な存在……この女学園を救って下さい。その為に、この学園に通う全ての異性に、貴方への恋心を植え付けておきました」

「だ、だから、あんなことに……」

「恋では不十分かもしれませんが。明日までに、性的願望も最大まで植え付けておきましょう。明日から、彼女たちは貴方を想像するだけで発情するようになります。一目見るだけでも濡れてしまい、もしも触れられたりしたら、それだけでオーガズムへと達してしまうでしょう」

「とても信じられないな」

「まあ、明日になれば、身をもって思い知るでしょう。それでは」と言つて（自称？）女神は去っていった。

まず有り得ない話だ。

俺の体液がワクチンなのも、世界がゾンビで溢れる点も……

そして、明日には学園の女子が全員、俺に……

ああ、とても信じられない。信じられない。

なのに、なんだろう……この高揚感は……

期待するな、期待するな。

そう振り切りたいのに……俺の身体は、まるで明日に備えるかのように、熱を帯びていた。

無情にも時は流れていき……俺は、明日を迎えるのだった。

## 第一話 目覚めの一杯

翌日……

目が覚めると、やはり女神の言葉に嘘は無かったと実感する。

スマホを見ると、未読メッセージが99+に……

恐る恐る開いてみると、そこはモーニングコールの合唱だった。

学生だけではない。同僚の女教師までも、俺に愛の言葉を贈ってきている。

「うわ……このヒトは、確か既婚者で今年45じゃなかったか？」

「流石に引くわね、これは……」

「ああ………えっ!？」

布団から顔だけ出してスマホを弄る俺。その背後から声が掛かってきた。

あれ……なんか、部屋の匂いが甘酸っぱいような……

まさかと思って顔を上げると、そこには見知った顔ぶれが並んでいた。

「うわあああああっ!!」

俺を見つめる大勢の女生徒がいたのである。布団を囲み、覗き込むように俺を視ている。しかも……その目は野性的で、やたら目が血走って見えた。

俺の全身を舐め回すように、ねっとりしているのを感じる。

瞬間、ゾクツとした情動が俺の背筋を走り抜けた。

よく見ると、みんな一様にスカートへと手を突っ込んでいるのだ。

「あああんっ、先生の寝顔、最高でしたわ♪」

「もう、何回、イツちやっただろ……先生の寝顔、可愛すぎて……」

「もつと視たかったけど、やっぱり素顔が一番好きっ!!」

「ああ、手が止まらないよお……!!」

「な、う、嘘だろ……」

みんなの顔が朱く染まり、暑い訳でも無い部屋で大粒の汗を浮かばせている。

見間違えではなく、彼女たちは自慰へと耽っていた。

俺の寝顔をオカズに……

粘液を掻き混ぜる音と共に、幾重の女臭が部屋へと充滿している。

俺は、実のところ臭いフェチだ。

局部。愛液。汗。どれも俺の好きな臭いである。相手が処女となれば格別だ。

それが何人も……この狭い部屋の中で……

「あ、ぐっ……」

「どーしたの、悟さん♪」

「い、いや……」

「なんか焦ってて可愛い」

「あーん、もう大好きっ」

「私も」

戸惑っている間にも、女子たちが一斉に動き出す。

寝ている俺を取り囲み、逃がさないとはかりに覆い被さってきて……

そのまま唇を奪われてしまった。

「んんっ……」

「せ、せんせ……キ、キスして良いです、か……？」

「も、もうしてるじゃねえか……」

「だ、だって、断わられたら、イヤだから……」

「じゃ、き、聞くなよ……」

「わ、分かりました。聞かずに……唇を奪います……」

「わ、私も……ちゅっ」

「私も……」

「次は私……」

「私もやる……」

「わ、私、もう一回……」

「ちよっと、何回もしないでよ。次は私なんだから」

抵抗しようにも、あまりに多勢に無勢である。女は我先にとキスを求めてきてその激しさは窒息しそうな程だった。

次から次へと唇の雨が降り注ぐ。キスは一瞬だけ。一秒くらい唇が触れて……すぐまた違う一秒間が訪れての繰り返しである。淡々と盪回しに十人十色の唇を味わっていく。まだ寝起きで意識が覚醒しきっていないのかもしれない。

キスを連続して受ける状況に、大したリアクションも出来ず……

俺は、ただ受け入れるだけだった。

一通りキスを終えると、誰かが俺の制服を脱がし始める。

あつという間だった。

俺は全裸となり、女子たちの狂喜乱舞が声となって劈いた。

本当に、あの女神の言う通りになった。

俺の知ってるコイツ等は、恋愛や性に興味はあっても、それを表に出すような性格じゃなかった。

あの女神が、コイツ等の枷を外したのだ。

つまり、この女子たちは……いや、コイツ等だけじゃない。

学園の全ての女子が、俺に恋するようになっていくのか。

しかも、発情している。

『彼女たちは貴方を想像するだけで発情ようになります。一目見るだけでも濡れてしまい、もしも触れられたりしたら、それだけでオーガズムへと達してしまおうでしょう』

「ヤベエな……」

俺は、ただ立ち尽くすしかなかった。

……しかし、同時に使命感が湧き上がってくる。

女神の言うことが本当なら、近い未来に世界がゾンビで終わることになる。

考えただけで恐ろしい。

だが、俺の体液なら救えるという……じゃあ、他に選択肢は無いじゃないか。

女子を救うという大義名分により、今度は俺の枷が外れる。

全ての女学生が俺を好いているとハッキリした以上……もはや俺の理性は糸に等しい。学園中の女子が俺とヤリたがっている……そんな状況に耐えられる筈もなく、感情を司る男性器は早くも覚悟を決めていた。



「あつ、あああああつ、あああああああああーっ！！」

「どんな感度に設定したんだよ、あの女神は……」

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ、で、出ちやうつ、あああああーっ！！」

「ふあああああつ、せんせつ、大好きつ、こんなつ、こんなことなら、もつと早く告白してれば良かったのにいっつ、あああああつ、幸せええっー！！」

「悟さあん♪ は、早く私にも……私にもして下さいっつ、私を、オナニーだけでイカせないでえええつ、で、でも、悟さんでオナニー……なんでこんなに気持ち良いのおおおつ、あああああああああああああああつ！！」

「ちよ、ちよつと、寮だから、もう少し静かにだな……」

なにもかもが女神の言葉通りだった。

俺を視るだけで濡れて……もしも俺に触られれば、それだけで達するという。

寧ろ、女神の言葉以上かもしれない。

布団へと女子を川の字に寝かせて、二人に手マンを、一人に正常位を嚙ましている所なのだが、如何せん相手の感度が凄まじい。軽く女性器を撫でただけでも愛液が迸り、指を入れた瞬間に潮を撒き散らしていた。

それでも気にせず陰唇を抉り、陰核を擦ってみると、まるでエロ同人のようにぐると瞳が跳んで白目を剥き、天井に届く勢いの女潮を噴き上げたのだ。

潮って、こんなに出るのか……大丈夫なのか？

もう五分近く拭きつ放しである。それを一身に受け止める俺。全身は女たちの白潮でドロドロになっていた。

こんなに潮を浴びた経験は、当然ながら初めてだ。

まるで水を得た魚の如く、潮を浴びる程にペニスの活力が湧き上がる。

剛直を何度も何度も女に叩きつける。潮が噴こうとも意に介さず……やめてと叫んでいても意に介さず、快楽の赴くままに俺は腰を振るった。

ついさつきまで処女だったソレは、気絶と快楽を繰り返して心身をボロボロにする。もはや人形となったソイツに、俺はありったけの精液をぶちまけてやるのだった。

「あへえ……あへえ……あへえ……あへえ……」

「あひ、あ、は、あ……」

「ひあ、ああ、ああああ……」

布団で天井を仰ぐ三人組。自らの潮と汗でぐちゃぐちゃにふやけている。

それでも、まだ足りないと言いたげに、自らの手で己を慰めていた。

まさに壊れた人形……女神の力に、俺は恐れおののいた。

現場を見ていた女子も、流石の圧巻に吞まれてしまう。

「せ、性交渉とは、あれ程までに激しいものなの、ですね……」

「風紀委員の恵那様が、あんな姿で白目を……」

「なんて汚い……なのに、何故か視てるだけで……私まで……」

「わ、私も、す、するの……!?!」

「別に、しなくても良いんだぞ」

「……………」

「やらないなら、掃除して学園に行こうか」

「ま、待ってくださいっ!!」

まだ相手していない女子たちが立ち上がる。一人残らず泣いていた。

俺とのセックスが怖いのだ。

だけど、それ以上に興味があるらしい。その葛藤が、涙。

葛藤……

しかし、答えは最初から決まっているのだった。

「私にも、して下さい、悟先生……」

「私も……」

次々と挙手。全員の手が上がっていた。